

## 令和 7（2025）年度 資源評価調査報告書（拡大種）

種名	ニベ	対象水域	太平洋中・南部
担当機関名	水産研究・教育機構 水産資源研究所 社会・生態システム部、千葉県水産総合研究センター、神奈川県水産技術センター、静岡県水産・海洋技術研究所浜名湖分場、三重県水産研究所、徳島県農林水産総合技術支援センター水産研究課、宮崎県水産試験場	協力機関名	

## 1. 調査の概要

太平洋中・南部のニベ (*Nibea mitsukurii*、以下、「本資源」という) は、千葉県、神奈川県、静岡県、三重県、徳島県、宮崎県の定置網漁業 (以下、「定置」という) 等の沿岸漁業、および沖合底びき網漁業 (以下、「沖底」という) で漁獲されているが、主要な漁獲対象とはなっていない。本資源は、各県・各漁協において漁獲統計上「ニベ」、「にべ類」、「ぐち類」等の銘柄で、他のにべ・ぐち類 (オオニベ、シログチ、コイチ) と区別されずに集計されている (小柳津ほか 2025)。

本報告書では、ニベが含まれる可能性が高い銘柄 (以下、「ニベ関連銘柄」という) を集計対象として、6 県の沿岸漁業と沖底のニベ関連銘柄の漁獲量の推移を示した。なお、銘柄として「ニベ」が存在する千葉県、静岡県、徳島県については、「ニベ」銘柄単独での漁獲動向も示した。また、今年度は、本資源を単独集計している千葉県の「ニベ」銘柄の沖底漁獲量データと、太平洋北区 (以下、「北区」という) の沖底の漁獲成績報告書 (以下、「漁績」という) の漁獲努力量 (網数) を用いて、単位努力量当たり漁獲量 (以下、「CPUE」という) を推定した。この CPUE に基づき、千葉県銚子沖を中心に漁獲された本資源の資源状態を示した。

以降、本報告書の生物名の表記について、生物名、銘柄名、集計単位の名称について、以下のように定義・記載することとする (小柳津ほか 2025)。“○○○ (類)”という「」を付記しない表記は、その生物の標準和名もしくは生物の名称を示す。“「○○○」銘柄」という表記は、各県の産地漁協において水揚げされた生物に対して使用されている銘柄の名称を示す。“集計名『○○○』”という表記は、実際の産地漁協の“「○○○」銘柄”を各県の資源評価参画機関が取りまとめた際の集計単位の名称 (以下、「集計単位銘柄」という) を示し、集計名称の種類や分類は県独自の基準で決定されている。

今年度の本報告書では、三重県と宮崎県の漁獲量を修正した。三重県の漁獲量におい

て、従来のニベ関連銘柄の漁獲量を集計名『ニベ』と『シログチ』に区分することが可能になったため、今年度は集計名『ニベ』のみを使用した。また、宮崎県については、従来の漁獲量の集計過程において、ニベ以外のニベ科魚類が主体である銘柄の漁獲量が、2019年以降の本資源の漁獲量に混在していたことが判明したため、本報告書の2019～2024年の漁獲量はこの混在分を差し引いたものとした。

## 2. 漁業の概要

ニベ関連銘柄の5県の総漁獲量は、漁獲量の多い県のデータが出揃った2006年以降をみると、2016年まで変動しながらも横ばい傾向であったが、2017～2020年の間で、33.06トンから44.63トンまで増加し、2021年は過去最大の48.34トンとなった。その後、2022～2023年にかけて40.43トンまで減少し、2024年は38.14トンとなった（図1、表1）。

漁獲量の推移は県により異なっていた（図2、表1）。千葉県では、北区の沖底等の複数の漁業で漁獲されるが、漁協によって主要漁法は異なる。千葉県のニベ関連銘柄の漁獲量は、2004～2009年にかけて10.55トンから19.70トンまで増加し、2010年に21.01トン記録したが、2011～2013年の間に6.06トンまで大きく減少した。2014年には再び増加に転じ、2015年は17.05トンとなった。2016、2017年は12トン前後で推移したが、2018年以降は急増し、20.35～25.13トンで推移した。その後、2022～2023年には19.35トンから15.29トンまで減少し、2024年の漁獲量は14.85トンであった。

神奈川県では、相模湾の大型定置と小型定置による漁獲が主体である。漁獲量は、2017～2024年に0.30～4.05トンで推移し、2024年は1.71トンであった。ただし、神奈川県の漁獲量は2017年4月から記録されており、2017年4月～2020年9月の期間は2漁協、2020年10月～2024年12月の期間は3漁協の集計値である。

静岡県では、船びき網等での漁獲がある。ただし、現在得られているのは、遠州灘沖を漁場とする1漁協分のみの漁獲量であり、県内全体の情報ではないことに留意する必要がある。集計済みの漁獲量は、1988～2009年において、突発的に漁獲量が増大した1997年と2006年を除いて、0.01～1.19トンで推移した。2010～2017年も1トン前後であったが、2018～2021年では2.27トンから4.37トンまで増加し、2022年は過去最大の6.27トン記録した。2024年の漁獲量は5.42トンであった。

三重県では、2011～2024年において、大型定置、次いではえ縄、小型定置がニベ関連銘柄の漁獲量の上位を占めた。漁獲量は、2011～2015年において3.62～6.20トンで推移した。2016年には一時的に1.32トンまで減少したものの、2017～2019年は2015年以前と同程度（2.63～5.75トン）まで増加した。その後、2020年には11.27トンまで急増し、2021年は一時的に7.43トンまで減少したものの、2023年の漁獲量は2011年以降での最大値12.36トンとなった。2024年の漁獲量は11.06トンであった。

徳島県では、大型定置と小型定置による漁獲が主体である。漁獲量は、2011年を除き、2004～2016年まで1トン未満で推移していたが、2017～2019年には1トンを超えて漁獲されるようになった。2020年以降はわずかに減少して1トン未満で推移している。2024年の漁獲量は0.67トンであった。

宮崎県では主に大型定置で漁獲されている。漁獲量は、2006～2010年で26.91トンから

8.09トンまで顕著に減少したが、2011～2017年にかけては年による増減はあるものの、徐々に増加していき、2017年には15.30トンとなった。その後、2018～2024年にかけて減少し、2024年は過去最低の4.12トンとなった。なお、本報告書における宮崎県のニベ関連銘柄の漁獲量は、宮崎県で設定された3銘柄（「にべ・ぐち類」「ぐち類」「シログチ」銘柄）の合算値を使用しており、宮崎県が公表するオオニベ資源評価において「オオニベ」と判断された銘柄は除いている（宮崎県 2025）。

千葉県、静岡県、徳島県における集計名『ニベ』の近年の漁獲量は、県ごとに変動が大きく、推移も異なっていた（図2）。静岡県では、集計されている銘柄が集計名『ニベ』のみであるため、本県の集計名『ニベ』の漁獲量の推移は、ニベ関連銘柄の漁獲量の推移の記述箇所で述べた通りである。千葉県と徳島県の集計名『ニベ』の漁獲量の推移は、県全体のニベ関連銘柄の漁獲量の推移とは異なっていた。徳島県では、集計名『ニベ』の漁獲量は2018年に一時的に急増したが、2019～2021年において急減し、2022～2023年に増加し、2024年には減少した。また、千葉県の集計名『ニベ』は、千葉県内の漁協で集計されている「ニベ」銘柄と同一であり、ニベが漁獲の主体と考えられる。千葉県の「ニベ」銘柄の漁獲量は、2011～2013年にかけて減少し、2015年の7.06トン記録した以外は低い水準となっていたが、2018年以降は増加傾向にあり、2024年は6.94トンとなった（図2）。2004～2024年における漁獲量の22～81%は、銚子港で水揚げされた北区の沖底によるものであった（図3）。銚子港に水揚げした北区の沖底漁船は、房総北部沖～常磐南部沖を中心に操業しており、そのうち、網数の90%以上を板びきが占めている（図4）。板びきは、直近10年間（2015～2024年）において、その約50%が千葉県の漁船（以下、「千葉県船」という）、残りが千葉県以外の県の漁船（以下、「千葉県外船」という）で構成されている。千葉県船の網数は、2000～2012年において減少し、2013～2014年で増加したが、2015年以降は緩やかに減少している。一方で、千葉県外船の網数は、2000～2007年において減少したが、2008～2013年にかけて急激に増加し、2014～2023年では緩やかに増加した。2024年は前年から減少し、2012年以降では最低であったが、期間全体の中では高い水準を維持している（図4）。

なお、太平洋中・南区の沖底（かけまわし、2そうびき）の「ぐち類」銘柄の漁獲量は、1973～2024年で大きく変動している（図5、表2）。一方で直近20年間（2005～2024年）に着目すると、漁獲量は、2005～2019年は2そうびきで2トン前後、かけまわしで0.00～10.00トンで推移していたが、2020～2022年に微増した。2023年からは減少し、2024年には2そうびきで0.14トン、かけまわしで2.83トンとなった。

### 3. 生物学的特性

(1) 分布・回遊：仙台湾～九州南岸の太平洋側沿岸に分布する。浮遊生活期である卵・仔魚は浅海の表層から中層に分布する。その後、成長し遊泳力が増強された稚魚は、徐々に底層に移動し、着底すると考えられている（谷口 1982a）。稚魚期以降は、底生生活期となり、水深 100～500 m の砂泥底に分布する（谷口 1982b）。また、冬季には越冬のため沖合域に移動すると考えられている。本資源は、アイソザイム多型の分析より、紀伊水道を境に東西で有意な遺伝的差異が見られる（谷口 1982b）。ま

た、浮遊生活期では黒潮を含む海洋構造による障壁によって、底生生活期では砂泥底周辺の岩礁地帯が地理的障壁となることによって、地理的隔離が進んでいると考えられている（谷口 1982b、Menezes et al. 1990）。

- (2) 年齢・成長：本資源の年齢・成長関係式は以下の式で表される。

$$L_t = 385(1 - e^{-0.429(t+0.611)}) \quad (\text{谷口 1982c})$$

寿命は不明である。発育段階は、仔魚前期（1.6～3.0 mm）、仔魚後期（3.0～9.0 mm）、稚魚期（9.0～90.0 mm）、若魚期（90～200 mm）、成魚期（200～400 mm）という区分で考えられている（谷口 1982a）。

- (3) 成熟・産卵：本資源全体の産卵期は不明であるが、水温によって決定している可能性が示唆されている（谷口 1982d）。土佐湾では4月下旬～6月上旬、茨城県鹿島灘では7～9月と、水温18～22℃の時期が産卵期となっている。産卵場は、土佐湾の場合、水深30 m以浅の砂質の浅海域一帯であると示唆されている。本種は、成長が早い個体の場合、満1年で成熟する。繁殖期には沿岸域へ移動し、砂泥底において浮遊卵を複数回に分けて産むことが知られている（谷口 1982d）。
- (4) 被捕食関係：当歳魚について、初期は浮遊性のアミ類、ユメエビ類、底生のクルマエビ類などを主体に捕食する。その後、稚魚期から若齢魚期に移行する全長11～12 cmの頃、クルマエビ類や魚類の仔稚魚が主体となる。成魚は、底生のアミ類を主体に、甲殻類を多く捕食する。ただし、大型魚の中にはイワシ類などの魚類を捕食することもある（谷口 1982e）。

#### 4. 資源状態

本資源の漁獲量は、その他のにべ・ぐち類と区別されずに記録されているため、漁業データに基づく正確な資源水準と動向の判断は困難である。しかし、近年の聞き取り調査によって、ニベ関連銘柄の種類とその種組成がおおよそ把握可能となった（小柳津ほか 2025）。そこで、本資源が単独集計されていると判明した千葉県銚子港における「ニベ」銘柄の沖底漁獲量と、北区沖底漁績から得た銚子港に水揚げした漁船の漁獲努力量（網数）を用いて、本資源のCPUE（kg/網）を算出した。ただし、2004～2024年において、千葉県船は一貫して沖底の板びきとして操業してきた一方、千葉県外船の一部の漁獲量は、期間中に漁業種類（小型底びき網から沖底）を変更した影響を含む可能性があり、年による漁獲効率の変化が懸念される。したがって、本資源のCPUEは、千葉県船と千葉県外船で分けて算定するとともに、資源水準と動向の判断には千葉県船のCPUEのみを採用し、千葉県外船は参考値として記載するに留めた。

千葉県の「ニベ」銘柄の沖底の漁獲量と北区沖底の網数を用いて2004～2024年の本資源のCPUEを算定した結果、千葉県船と千葉県外船のCPUEはそれぞれで大きく変動していた（図6、表3）。千葉県船のCPUEは、2004～2008年で0.49～1.86 kg/網と大きく増加したが、2009～2013年において過去最低の0.04 kg/網まで急減した。2014～2016年には0.10～0.75 kg/網まで増加したものの、2017～2019年に減少し、その後2020年に一時的に0.92まで増加したが、2021年には0.31 kg/網と再び減少した。2022年以降は増加を続け、2024年は0.79 kg/網となった（図6）。千葉県外船のCPUEは、2005～2008年に急減し、2007年

には漁獲記録がなかった。その後、2009年に増加したものの、2010～2014年は緩やかな減少が続いた。2015年に1.75 kg/網に急増したが、2016年には0.09 kg/網と再び急減し、2017～2022年にかけて0.11～1.68 kg/網と再び急増した後、2023年には0.71 kg/網まで急減した。2024年は、過去最大の2.10 kg/網となった（図6）。

銚子沖を中心に漁獲される資源の水準については、千葉県船のCPUEの推移を基に、最大値（1.86 kg/網）と最小値（0.04 kg/網）の間を3等分し、上から順に高位、中位、低位として判断した（図6）。また、資源動向は、直近5年間（2020～2024年）の変動傾向により判断した。その結果、銚子沖周辺に生息する本資源について、資源水準は中位、動向は横ばいと判断された。なお、2021年で一時的に減少したが、2022年以降の3年間のCPUEは増加を続けている。前述のとおり、推定した資源水準・動向は千葉県銚子沖に限定されるものであり、本資源全体の情報ではないことに留意する必要がある。しかしながら、宮崎県以外の5県において、ニベ関連銘柄の直近5年間（2020～2024年）の漁獲動向は安定しており、ニベの割合が高いと考えられる千葉県の「ニベ」銘柄の漁獲量および千葉県銚子沖のCPUEも横ばい傾向にあることから、少なくとも、資源全体として急激な減少傾向を示す情報は得られなかった。

## 5. その他

本資源の資源評価の精度向上に向けて、本資源単独の漁獲量を把握するために、ニベが含まれる銘柄について、現状得られる銘柄の種類とその種組成を継続的に把握することが重要である。現状ニベが主体となっているのは千葉県の「ニベ」銘柄のみであり、他県ではその他のにべ・ぐち類が多く含まれている。一方で、徳島県では2023年から定置で漁獲されるにべ・ぐち類について魚種別の集計を始めている。今後このようなデータが蓄積されていくことで、正確な漁獲量の把握、ひいては本資源の資源評価の精度向上につながることを期待される（小柳津ほか 2025）。

2018年以降、ニベ関連銘柄の漁獲量、もしくは各県の漁獲量の変動は大きいものの、増加傾向を示している。一方で、この間に漁業の操業形態の変化等は見られていない。黒潮大蛇行は2025年4月に終息したとされているが（[https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/shindan/b\\_2/kuroshio\\_stream/kuroshio\\_stream.html](https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/shindan/b_2/kuroshio_stream/kuroshio_stream.html)、2025年11月27日閲覧）、漁獲量の変動要因については、黒潮流路の変化等の環境変動との関連も考えられるため、引き続き漁獲量および漁獲物の種組成の変化、および海洋環境についてモニタリングを継続し、それらの情報を収集することが重要である。

## 6. 引用文献

- Menezes, M. R., Taniguchi, N., Seki, S. (1990) Degree of intraspecific genetic divergence and variability in three sciaenid species. *Japanese Journal of Ichthyology*, **37**, 39-48.
- 宮崎県 (2025) オオニベの資源評価. 令和7年度宮崎県資源評価結果, 39-44.
- 小柳津瞳・内山雅史・田島良博・市川 稜・藤原正嗣・木本 翔・石川陽子・平山仁斗 (2025) 太平洋沿岸におけるにべ・ぐち類の漁獲状況. 黒潮の資源海洋研究, 119-130.
- 谷口順彦 (1982a) ニベの生物学-V 初期発育段階. *海洋と生物*, **20**, 210-215.
- 谷口順彦 (1982b) ニベの生物学-III 種族分化. *海洋と生物*, **18**, 69-75.

谷口順彦 (1982c) ニベの生物学-VII 年齢と成長. 海洋と生物, **22**, 388-394.

谷口順彦 (1982d) ニベの生物学-IV 成熟・産卵. 海洋と生物, **19**, 146-151.

谷口順彦 (1982e) ニベの生物学-VI 摂餌生態. 海洋と生物, **21**, 310-315.

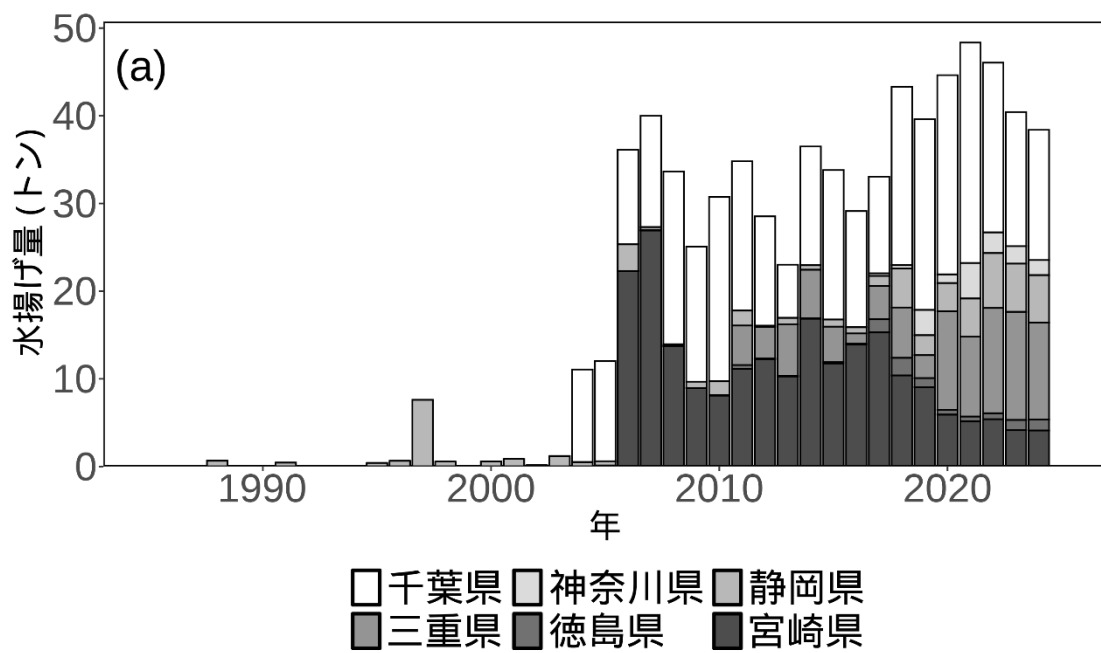


図1. ニベ関連銘柄の県別漁獲量

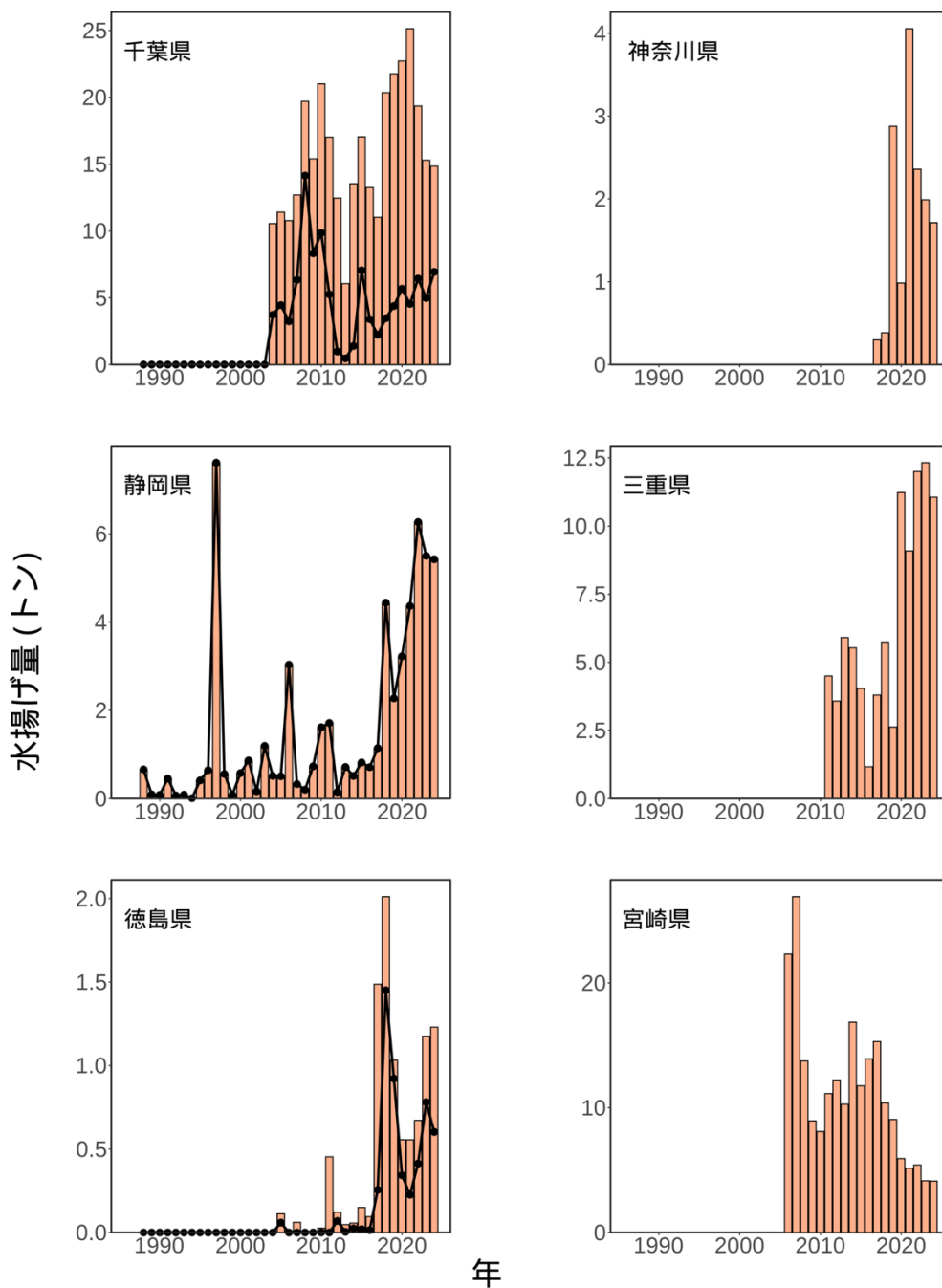


図2. 県別のニベ関連銘柄および集計名『ニベ』の漁獲量  
棒グラフは漁獲量を示す。千葉県、静岡県、徳島県の黒実線は各県の集計名『ニベ』の漁獲量を示す。実線がない県については、本資源が集計名『ニベ』で集計されていないことを示す。

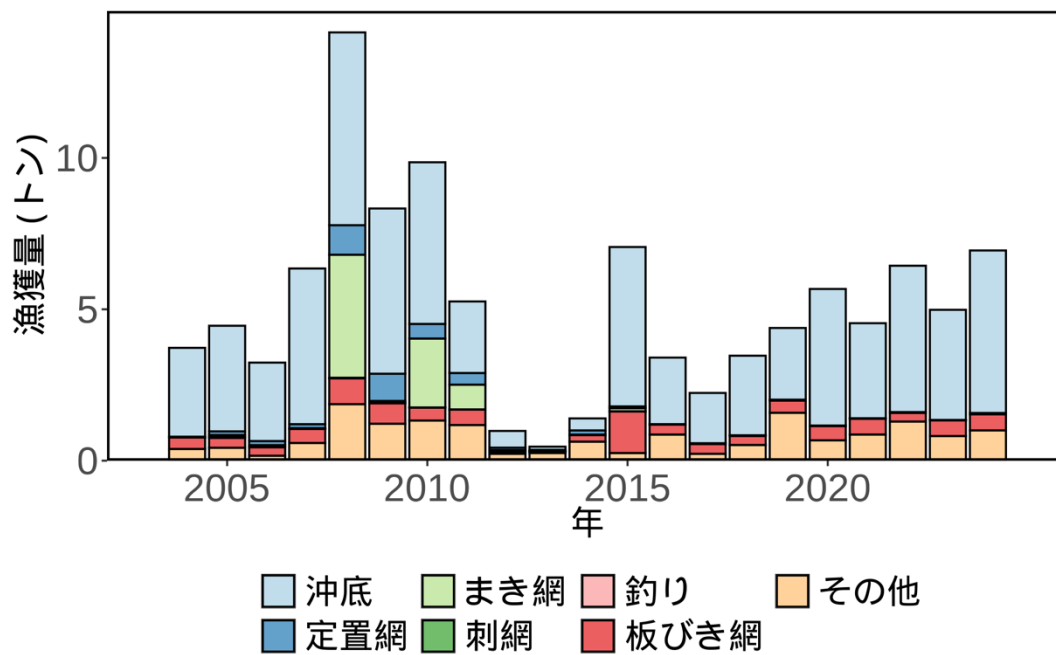


図3. 千葉県の「ニベ」銘柄の漁法別漁獲量

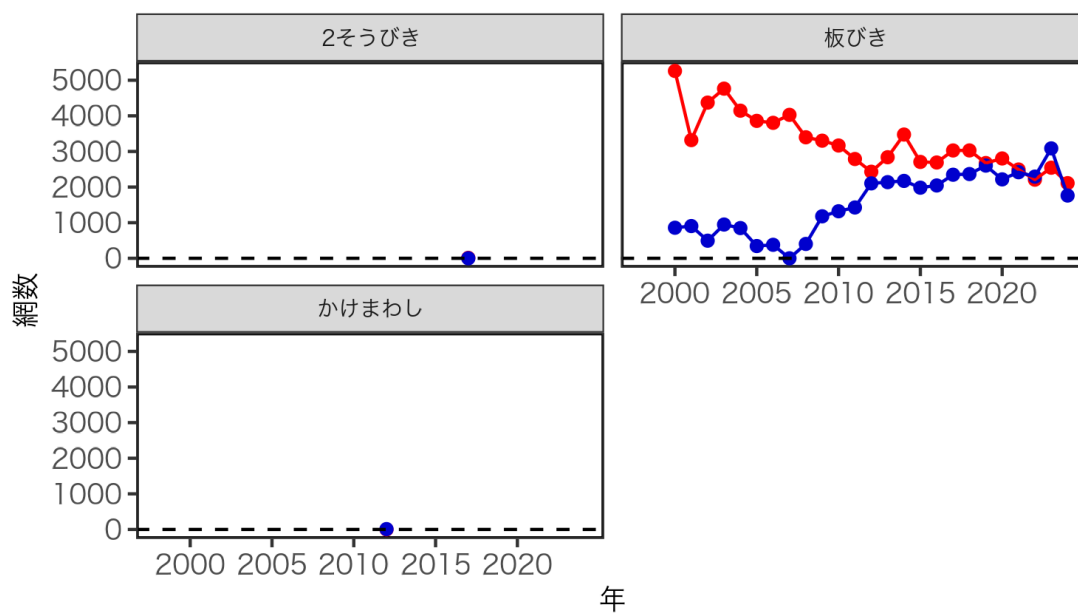


図4. 銚子港で水揚げした沖底北区漁船の漁法別網数  
赤線は千葉県船、青線は千葉県外船を示す。

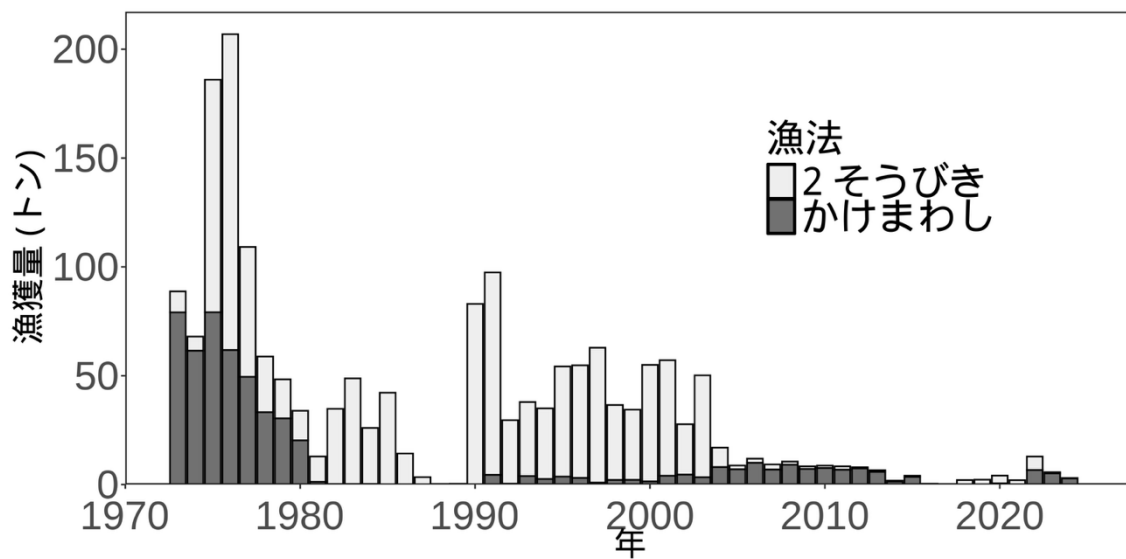


図 5. 太平洋中・南部における沖底（2 そうびき、かけまわし）による「ぐち類」銘柄の漁獲量

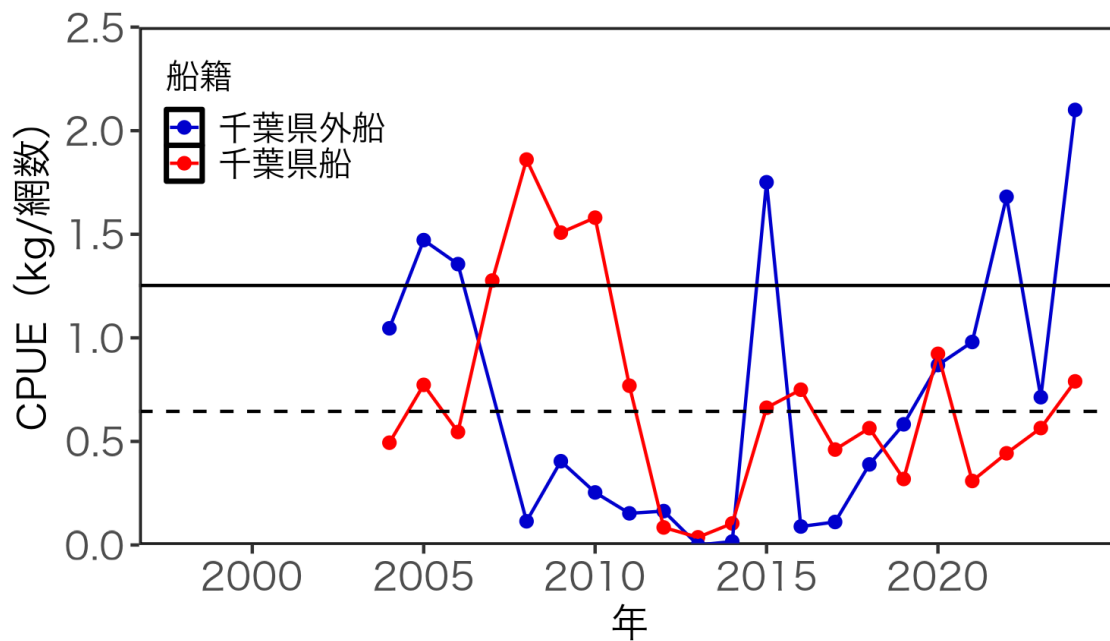


図6. 銚子沖周辺に分布する資源のCPUE

黒破線は千葉県船のCPUEの推移から設定した資源水準の低位と中位の境界、黒実線は中位と高位の境界を示す。

表 1. ニベ関連銘柄の県別水揚げ量（トン）

「-」は未集計または漁獲記録なし。括弧内は漁獲量の集計に使用した漁協数を示す。

年	千葉県 (10 漁協)	神奈川県 (3 漁協)	静岡県 (1 漁協)	三重県 (複数)	徳島県 (3 漁協)	宮崎県 (15 漁協)
1988	-	-	0.66	-	-	-
1989	-	-	0.09	-	-	-
1990	-	-	0.08	-	-	-
1991	-	-	0.45	-	-	-
1992	-	-	0.07	-	-	-
1993	-	-	0.09	-	-	-
1994	-	-	0.01	-	-	-
1995	-	-	0.41	-	-	-
1996	-	-	0.64	-	-	-
1997	-	-	7.61	-	-	-
1998	-	-	0.56	-	-	-
1999	-	-	0.09	-	-	-
2000	-	-	0.58	-	-	-
2001	-	-	0.86	-	-	-
2002	-	-	0.17	-	-	-
2003	-	-	1.19	-	-	-
2004	10.55	-	0.51	-	-	-
2005	11.41	-	0.50	-	0.11	-
2006	10.77	-	3.03	-	0.01	22.31
2007	12.69	-	0.33	-	0.06	26.91
2008	19.70	-	0.20	-	0.01	13.74
2009	15.40	-	0.73	-	0.00	8.94
2010	21.01	-	1.62	-	0.03	8.09
2011	17.02	-	1.71	4.54	0.45	11.13
2012	12.46	-	0.15	3.62	0.12	12.22
2013	6.06	-	0.72	6.20	0.05	10.28
2014	13.54	-	0.51	5.63	0.06	16.85
2015	17.05	-	0.82	4.21	0.15	11.75
2016	13.25	-	0.71	1.32	0.10	13.91
2017	11.03	0.30	1.14	3.83	1.49	15.30
2018	20.35	0.38	4.44	5.75	2.01	10.39
2019	21.76	2.88	2.27	2.64	1.03	9.05
2020	22.72	0.99	3.22	11.28	0.56	5.92
2021	25.13	4.05	4.37	9.26	0.55	5.15
2022	19.35	2.36	6.27	12.03	0.67	5.40

表 1. (続き)

年	千葉県 (10 漁協)	神奈川県 (3 漁協)	静岡県 (1 漁協)	三重県 (複数)	徳島県 (3 漁協)	宮崎県 (15 漁協)
2023	15.29	1.99	5.50	12.36	1.18	4.14
2024	14.85	1.71	5.42	11.06	1.23	4.12

表 2. 1973～2024 年の太平洋中・南部の沖底（2 そうびき、かけまわし）による「ぐち類」銘柄の漁獲量（トン）

※は漁獲量が 10 kg 未満。

年	2 そうびき	かけまわし	年	2 そうびき	かけまわし
1973	9.63	79.10	1999	32.27	2.17
1974	6.46	61.51	2000	53.52	1.46
1975	106.85	79.13	2001	53.11	4.01
1976	145.09	61.80	2002	23.15	4.57
1977	59.66	49.50	2003	46.83	3.36
1978	25.61	33.22	2004	8.97	8.00
1979	17.94	30.41	2005	1.74	7.03
1980	13.59	20.31	2006	1.91	10.01
1981	11.67	1.23	2007	2.33	6.92
1982	34.61	0.18	2008	1.46	9.09
1983	48.58	0.20	2009	1.20	7.15
1984	25.78	0.23	2010	1.12	7.61
1985	42.17	0.03	2011	1.54	6.83
1986	14.17	0.08	2012	0.51	7.44
1987	3.40	0.01	2013	0.75	5.84
1988	0.15	0.04	2014	0.39	1.42
1989	0.19	0.15	2015	0.54	3.53
1990	82.87	0.11	2016	0.35	0.01
1991	92.98	4.47	2017	0.11	0.00
1992	29.21	0.37	2018	2.07	0.00 (※)
1993	34.03	3.90	2019	2.24	0.00 (※)
1994	32.46	2.56	2020	3.58	0.54
1995	50.62	3.64	2021	1.98	0.03
1996	51.75	3.01	2022	6.16	6.71
1997	61.97	0.88	2023	0.53	5.15
1998	34.44	2.10	2024	0.14	2.83

表 3. 単位努力量あたり漁獲量 (CPUE) (kg/網数)

「-」は未集計または漁獲記録なし。

年	千葉県船	千葉県外船
2004	0.49	1.05
2005	0.77	1.47
2006	0.55	1.36
2007	1.28	-
2008	1.86	0.11
2009	1.51	0.40
2010	1.58	0.25
2011	0.77	0.15
2012	0.08	0.16
2013	0.04	0.00
2014	0.10	0.02
2015	0.66	1.75
2016	0.75	0.09
2017	0.46	0.11
2018	0.56	0.39
2019	0.32	0.58
2020	0.92	0.87
2021	0.31	0.98
2022	0.44	1.68
2023	0.56	0.71
2024	0.79	2.10